

かごしま農36景



瑞の国

「ゆく川の流は絶えずして、しかも、もとの水にあらず」は『方丈記』の冒頭にある有名な一節。日本列島の風土と日本民族の無常観をずばり表現して、我が国が「水の国」であることを強く印象づける。そこにある「水の国」は、狭い急峻な地形を背景にして暴れまくる川に対する感慨から生まれていると考えられる。一度の雨でも、家や作物はおろか、人の命まで押し流し、一時として定まることのない川の流に、私たちの祖先は森羅万象を映し、生々流転を思ったのであろう。

このような国土だが、この複雑な地形を評価する指摘もある。『大地の刻印』（農業土木歴史研究会編）の中で旗手勲氏は「世界的な大河流域における『苦汗』的な揚・排水労働に比べ、勾配のより大きい日本では自然流下方式に多く依存し、余力を品質改良や肥料管理などの集約経営に傾斜できた」と。一方、東南アジアでは、水かさが増した分だけ背丈が伸びる浮き稲が栽培されているという。浮き稲は、何百、何千キロメートルもある大河の氾濫を利用し、運を天にまかせる東南アジアの水利を象徴する。このことは、同時に百キロ上流にさかのぼって高度がやっと二メートル高くなるくらい、おそろしく平らなため、平野一帯が半年ほど水浸しになり、水の駆け引きのできない稲作を意味する。それなら、ポンプを設置して排水すればよいではないかという意見もあろうが、水の持って行きどころを見付けるのに大変だ。堤防を築くには気の遠くなるような額の金がかかり、解決の見通しは容易につきそうにない。一方、干ばつによる水不足も簡単ではない。高低がないので網の目のように水路を造り、しかも断面を大きくする必要もある。その上、ポンプで汲み上げなければならぬとなると大変だ。

我が国では、水は低きに流れて当たり前だが、そこには勾配が得られているからだ。先人が十キロ、あるいは数十キロ開削した水路をはじめ、田一枚から田一枚へのかんがいに、そのことを見ることができる。我が国土に緻密な水利ネットワークを形成できたのは、自然流下のためであり、勾配のある地形のおかげであり、そこには先人が大地に働きかけた知恵と汗がある。人知と自然が織りなした水利ネットワークは、無常の水を豊饒の水に変え、瑞々しい国土を造った。そのとき、「水の国」は「瑞の国」に生まれ変わったといえる。

(1998年8月)

◇「かごしま農36景 / 発行: 鹿児島県農業農村整備情報センター」より

文: 門松経久

写真: 志摩清己「朝のひとつとき」第1回かごしまフォト農美展